

食の安全・安心を目指す 北の3 大学連携」

第2 回

農村サテライトの活動紹介

「食の安全 安心マイスター」の社会人向け取り組み

北海道大学 大学院農学研究院

特任助教 小林 国之

北の三大学連携は、取り組みの本体である酪農学園大学に設置された連携センターと、そのランチである北大の札幌サテライト、そして帯広畜産大学の帯広サテライトが、連携をして「食の安全・安心基盤」の確立に向けた教育・研究活動を行っています。

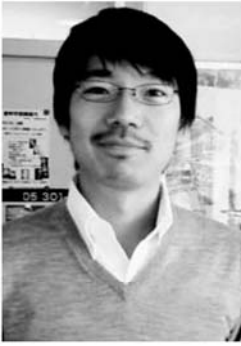
今回は、北の三大学連携を進める仕組みである「農村サテライト」について焦点を当てて紹介します。

農村サテライトは、道内八カ所に設置されそれぞれに異なる性格を持っています。その基本的な役割は地域と大学とを結ぶ拠点です。研究教育の拠点とは一体どういうことか。今年度試行開講されている社会人向けの教育プログラムである「食の安全・安心マイスター」という取り組みを中心に紹介します。

○食の安全・安心マイスターとは？

「食の安全・安心マイスター」とは、農業者、農業関係者、商工業者、消費者など、地域の幅広い人々をターゲットとして、食の安全・安心に関する基礎知識と考え方を身につけ、地域農業のリーダーとなっていくような人材を育成するため

小林 国之(こばやし くにゆき)氏



- 1975年 北海道に生まれる
- 2003年 北海道大学大学院農学研究科博士後期課程
修了 博士(農学)
- 2004年 日本学術振興会特別研究員
- 2007年 北海道大学創成科学共同研究機構をへて
2008年から現職。
- 2008年 北海道大学農学研究院・地域拠点型農学エ
クステンションセンター札幌サテライト

◆主著

「農協と加工資本 ジャガイモをめぐる攻防」
(日本経済評論社)、「地域農業の底力」(北海道
協同組合通信社、共著)、「北海道農業担い手育成
最前線熱意と知恵が育てる新農業人」(北海道協
同組合通信社、共著)。

のプログラムです。

プログラムは、講義とフィールドワークから構成されてい
ます。講義は、大学院の講義である「食の安全・安心基盤
学」を元にした内容で、その目的は、技術内容の講義にくわ
えて、安全や安心についての考え方、視点を内容としたもの
です。食の安全・安心に関する基礎的・基本的な考え方やそ
の背景にある理論的裏付け、生産から消費までを一貫して考
える総合力、相互に理解し合う・相手の立場を考える力を身
につけることを目的としています。

そうした講義にくわえておこなわれるのがフィールドワー
クです。これは、受講生みずからが日常生活の中から、「食
の安全・安心の基盤」に関する課題を見つけ、大学の教員や
受講生同士のアドバイスをうけながら、一つの解決方策を見
つけたり、課題の解決を図っていくというものです。

では、本年度に試行開講されている「富良野サテライト」
でのフィールドワーク参加者の皆さんのテーマをここで紹介
しましょう。

本年の二月にはフィールドワークに先立って、富良野サテ
ライトにおいてマイスターの座学部分の試行開講がおこなれ
ました。その時は、「食の安全・安心基盤学」を元にした講

義に加えて、地元の農業者の方に富良野の歴史を話してもら
う「地元学」の授業も設けました。皆さんは一体地元農業の
歴史が「食の安全・安心とどう関係があるのか」ということ
について、疑問を持たれたことと思います。

今回の取り組みは、「食の安全・安心基盤」ということが
キーワードとなっています。ここでポイントとなるのが「基
盤」という言葉です。現在、食の安全・安心は様々な場面で
枕詞のように使われていますが、この取り組みでは安全と安
心を異なる考え方として整理をして考えます。

さらにそれらを生み出す根源としての農業生産のあり方・
農村のあり方という基盤の部分から考えようという考え方が
「食の安全・安心基盤」というやや冗長な言葉に込められて
います。なかなかその思いが伝わらず、我々の力不足ではあ
りますが、流行語としての「食の安全・安心」とは異なるそ
の「基盤」を見つめ直そう、という意気込みが込められてい
ます。

やや話が脇にそれましたが、この「基盤」の部分構成す
るものとして、その地域の個性が重要であると考えています。
地域農業に関わりそこに住んでいる人たちが、自分の地域の
農業・農村に誇りを持つことが、食の安全・安心の基盤とし



写真1 「食の安全・安心マイスター」の検討会の模様。
場所は北大富良野サテライト。

て非常に重要であると考えています。そしてその誇りの源の一つとして、地域の歴史を理解するということが重要ではないでしょうか。

そうした考えから、講義の中に「地元学」を組み入れておられます。「食の安全・安心基盤」は、そこに住んで活動している人たちがそが担っていくものであると考えます。そこで、「食の安全・安心マイスター」というプログラムを立ち上げたわけです（この名称に「基盤」が抜けていることについては、我々もどうしたものかと考えています。しかし「食の安全・安心基盤マイスター」では格好がつかないのではと）。マイスターでは、地域の方々がみずからの課題を見つけ、解決していく「フィールドワーク」が、座学に加えて欠かすことの出来ない内容となるということが理解していただけたのではないかと思います。

○「フィールドワーク」

さて、講義の試行開講に参加していただいた方の中から、今年度「フィールドワーク」にも取り組んでいただける方を募集したところ、八名の方の参画をえました。皆様、様々な

バックグラウンドを持った個性溢れる方々です。何人かの方を紹介しますと、稲作に加えて、様々な種子の生産を行うSさんは、今年になって自分の活動を紹介するブログを開設しました。農業者がブログを使って様々な情報発信を行うこと自体はそれほど珍しいことではなくなりました。Sさんはこのブログを使い、どうすれば農業の現場と消費者とを繋ぐことが出来るのか、消費者と信頼関係を作ることが出来るのか、どのような内容の記事を書いたときに、どのような反応があるのか、について調べてみたいということです。忙しい作業の合間を縫って、まずは現在農業者が開設しているブログにどのようなものがあるのかを分類してみようということになっております。

レストランなどを経営しているOさん。マイスターの試行開講の時に聞いた「地元学」の中で、昔の「自給自足的な農村生活」に強い関心を持たれました。そこで、農家のお年寄りから聞き取り調査を行いながら、昔の富良野農家の一年間の「生活暦」を作成してみたいということになりました。そして、それを現在に再現するとしたら一体どうなるのか、ということを示してみたいと。

農家を引退したYさん。長年お世話になった自分の地域に

何か恩返しをしたいと考えて、いろいろな研究会などに参加をしてきたそうです。その一つとして「マイスター試行開講」にも参加していただきました。ご自分としては、地域のものを販売する「直売所」を開設したいというお考えをお持ちでした。マイスターの検討会の中で、普通の直売所にはない個性が必要だということになり、ご自分の地域の歴史を振り返って、これまでの地域の歴史の中で取り組んだいろいろな作物などを掘り起こして、そうした物語とともに販売できるような直売店にしてはどうかということになりました。ではどうすればそうした直売所の運営が出来るのか。ビジネスプランを一年かけて作成しようということで、現在作業を進められています。

このほかにも、インタビューから紡ぎ出す「富良野のふるさとの味とそのレシピづくり」や、富良野市内にオープンした「ふらのマルシェ」の実態調査などの取り組みがなされることになりました。検討会は、様々な経験をお持ちの方々が集まって、お互いに意見交換をしながら課題を絞り込んでいきます。こうした横のつながりも「マイスター」の大きな意義になっています。

今年度は試行開講ということで、富良野サテライトのみの



写真2 大学院生の農作業実習の開始前に北大の糸山研究員より「心得」についての説明がありました。

取り組みですが、来年度以降、順次取り組みを拡大していくことになっていきます。各サテライトの地域の特性に応じて、どのような「フィールドワーク」になるのか、どのような方々に集まっていたただけるのか。今から楽しみにしております。

この取り組みを行うことになったとき、いろいろな方々から、「マイスターはいいが、より重要なのはこれをとつたらどういうメリットがあるかということ」というアドバイスを頂いておりました。正直に言つて、その時には一体どんなメリットが考えられるのか、わからないままスタートしたというのが実態でした。しかし、今年度の取り組みを通じて、こうしたマイスターに参加した方々のネットワークこそが、重要なメリットになってくるのではないかという感じがしております。

○大学院向け教育プログラムもスタート

さて、教育プログラムのもう一つの中身である大学院生向けの「食の安全・安心基盤学コース」もこの四月よりスタートしました。受講生は三大学あわせて約三五名。テレビ会議



写真3 -1 ~3 -3 院生の作業実習風景。

システムを用いた三大学の連携による講義が行われています。また、五月には富良野市内において、農作業実習も行われました。春先の天候不順で作業が遅れ気味の中、受け入れていただきました農家の皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。実習は四泊五日。実習を終えた学生達は、なにやら遅しなくなったように感じました。この実習は、春作業だけではなく収穫作業も行います。そして、生産された作物の一部を大学で市場を開いて販売するという、生産から販売までの一連の工程を研修することになっています。名付けて「大学マルシェ」。道内の各サテライトからこだわりの農産物を出店してもらい、販売を通じて生産と消費を繋ぐ取り組みです。今年八月に北海道大学にて開催することになります。

今回は、教育プログラムの一貫しての社会人教育「食の安全・安心マイスター」と大学院生向けの「食の安全・安心基盤学」の取り組み状況について報告しました。そのほかにも、各大学、サテライトでは様々な活動を行っています。今回は「地域貢献」の部分についても紹介していきたいと思います。



写真4 マイスター受講者のYさんに、開拓の歴史をききながら地元を案内していただきました。当時にたてられた「開拓住居」。